慢性期の重症頭部外傷患者におけるボツリヌス療法の試み

小瀧　勝、内野　福生、岡　信男

自動車事故対策機構　千葉療護センター　脳神経外科

【目的】慢性期の重症頭部外傷患者において重度の麻痺、痙縮のためにリハビリテーション、日常生活動作（ADL）に支障をきたすことが多くみられる。これらの患者にボツリヌス療法を施行した結果について検討した。【対象・方法】千葉療護センターに入院中の重度後遺症患者のうち、多少の意思疎通が可能で、痙縮の改善によりADLの改善が期待できる6例を対象とした。男性4例、女性2例であった。受傷時の年齢、入院時の年齢、入院までの期間、受傷からの期間、痙縮の評価MAS（Modified Ashworth Scale)、リハビリテーションの効果について検討した。【結果】受傷時の年齢は16歳から59歳（平均34.3歳)、入院時の年齢は16歳から60歳（平均35.1歳)、受傷から入院までの期間は3ヶ月から1年2ヶ月（平均10ヶ月）であった。受傷から治療までの期間は7ヶ月から3年9ヶ月（平均2年）であった。痙縮評価を各関節のMASの推移を治療前と比較してみると1週目2.41、2週目2.41、4週目1.75、8週目2.0、12週目2.16であった。歩行改善が1例、関節可動域の改善が4例、不変が1例であった。【まとめ】慢性期の重症頭部外傷患者の痙縮に対してボツリヌス療法とリハビリテーションを併用して行った。6例中5例において、リハビリテーションとの併用により症状の改善が認められた。特に1例においては歩行の著名な改善が認められた。